



右◇階段ホール カラーフルなモザイクタイル仕上げの手摺が、個性的な空間に華を添えています。  
左◇キッチン 随所に織り込まれた天然素材による温もりが、ご家族の「温かさ」を表しています。

夫婦とは何なのだろうか…。  
この簡潔で深遠、かつ永遠の問いを  
思わず想起こさせる清々しさが  
その家を目撃したときから感じられた。  
お互いを慈しみ、励まし、助け合い、信じあう。  
この当たり前のように難しい問いと答えが  
家の中に一歩足を踏み入れた瞬間  
訪れた者を優しく包み込む…。  
家は愛を育む住処である。

## 風水住宅を訪ねて

愛知県常滑市・N様邸

郊外の小高い住宅地に建つその家には、春の陽光がたっぷりと注ぎ  
ご家族の幸せに満ち溢れた温もりが周囲をも優しく包み込み、光り輝く……。

### Q2 『風水住宅』に実際に住まわれるまでに、 どのような変化や体験がありましたか……。

松永先生に「人が集まる空間」「人が集まるリビング」を造りなさいと助言されたことで、それまでモヤモヤとしていた胸のつかえが一気に取れました。

カフェを造りたいと考えたのも、実は主人には詳しい事は話していませんでしたが、「人が集まる空間」を創りそこに集う様々な人たちのコミュニケーションの中から少しでも社会貢献ができるような何かをしてみたいとの思いがあったからで、先生のお話は清冽な清水が自然と身体の中に染み渡っていくように、私の心の隅々まで響き渡りました。

元々、私自身は模様替えをしたり、風水などを参考にしながら家を建てるのが好きでよくしていました。また、子どもの頃から実家では毎日読経をして手を合わせることは日常的に行っていましたし、祖母は空海縁の『四国八十八箇所巡り』などをしていたこともあって、松永先生のお話を聞いたときは、それまで知らず知らずのうちに身につけていた習慣の意味や認識を再確認することができました。あらためて自分自身の確信になったという感覚で、とても新鮮な感動がありました。

先生とお会いするまでも住宅会社から幾つか見積書をとおり、新築の家を建てる準備を進めてはいたのですが、なかなか話が前に進まなかった。「初めから諦めてはいけません」。先生と初めてお会いした日にお話くださったその言葉に後押しされるかのように、『家』を建てるという夫婦二人の夢が現実味をおびて一気に走り始めました。『カウンスリング』を受けた後、最初の設計プランと見積書が手元に届きました。決して安い値段ではなかったのですが、他の住宅会社のもの比べて、その内容の差は歴然としていました。正直、資金的に足りないかなと思いつつも、私たちがの方から造りたいと思っていた『夢』のアイデアの数々を話していくうちに、まず土地が見つかり、次に銀行の融資が決まったりと不思議なことが次々に起こり始めました。

後で聞いた話ですが、「自分たちの意見をしっかりと持っている彼らは必ず繁栄していくよ」と先生はその頃、周囲の方たちに言われていたそうです。

左◇外観 薪ストーブの煙突が、建物に「温もり」と「変化」を作り出しています。

中◇リビング 奥へと広がる曲線の壁が特徴的で、空間に豊かさをもたらします。

右◇ニッチ カーブを描くニッチは、ご家族お気に入りの小物で飾られています。



風水インタビュー

## FENG-SHUI Interview

### Q1 『風水住宅』との出会い、建てることになったきっかけとは何だったのでしょうか……。

私たち夫婦は、元々、同じ高校の先輩・後輩という間柄で、出逢ってから今年でちょうど23年目になります。地元の工業高校の窯業科を卒業したのですが、妻の父から誘われたこともあり、義父が経営する鉄工所に入り、今もその会社で「試験片加工者」の仕事に従事しています。

実は、その傍ら興味で始めた「カイロプラクティック」の仕事は現在では自宅ですべて行っています。高校時代、その後社会人になってもクラブチームに入って、趣味以上の情熱を傾けながら今までサッカーを続けていますが、ケガの治療やトレーニング法の一貫としてカイロに興味をもったことから、実は松永先生や、『風水住宅』のことを知り、自ら家を建てるきっかけとなりました。

数年前、妻が少し体調を壊して以前からの知り合いで、私にカイロプラクティック療法士になることを勧められていた先生をお訪ねしたところ、実は、その先生が『風水住宅』を建てられ、すっかり私たちがその心地良さと風水の話に興味津々となってしまった、というのが発端でした。

その頃、子どもたちもずい分と大きくなり、私たちもそろそろ自分たちの『家』を建てたいと考えていた時期でしたので、すぐに松永先生をご紹介して頂き、先生とお会いすることになりました。

養老で初めてお会いしたのですが、その第一印象はとても鮮烈でした。『住環境』と心、身体、病氣などがどのように関係しているのかという話題。また、本当の『風水』とはどういうものなのかなど、私はどちらかというと「面白い話をされる方」だと思っていたのですが、妻はそれのようなことを独学で勉強をしていたようで、どんどんその世界に嵌まっていたようでした。その後、妻は「直感的なひらめき」があったようで、『風水鑑定士養成講座』を受講するようになりました。妻が「カフェ」を併設した家を造りたいと言っていたところを、先生から「カフェは儲からないからやめなさい」と即座に言われたことで、そのことを断念したことに、私は一人ほっと胸を撫で下ろしていました。

### Q3 『風水住宅』に移られて、どのような変化や 周りからの反応がありましたか……。

この家が完成して丸2年が経ちましたが、この間に私たちの生活環境は素晴らしく変貌しました。

まず「よく人が集まってくる家だね」と言われるほど様々な人たちが集まって頂ける家になりました。私は今、アロマテラピーに関わる仕事を始めたのですが、皆さんから「この家は空気が違うね」、「すごく気持ちが良い」とか「この家は渦を巻いている」という評価まで飛び出して、お客さまからの評判は上々です。

主人は暫く足踏みをしていたカイロの仕事を始め、今では施術室も家の中に造りました。施術を受けに来られた方々からも「ここに来るのが楽しみです」と嬉しいお言葉を頂き、口コミでお客さまも徐々に増え、将来は本業にしたいとも考えているようです。

娘たちも友人を誘っては、2階のファミリールームで楽しく過ごしているようですし、もともと前向きな子供たちもさらにパワーアップし、しっかりと自分を見つめられる子になり、さらに交友関係も幅広くなりました。私たちの両親も頻りにこの家を訪ねてくるようになりました。私の父などは主人のCDを借りては中2階にある書斎スペースで聞き入っている姿をよく見かけるほどです。私が一番こだわった場所は、実はキッチンでした。システムキッチンのような無味乾燥な空間にはしたくなく、いつも家族やお客さまの顔が見えるオープンキッチンで、楽しく料理をしたかった。最高の場が今は造れたと思っています。主人はそんな私を見ては「男の大仕事をした実感」を感じると言いますが、主人には本当にいつも感謝しています。

薪ストーブの周りでは、いつもお客さまがまるで自分の家のように寛がれていることがあって、その様子を見るたびに私たちが表札に書き添えた言葉を思い出します。『La casa que se pone feliz』。スペイン語で「幸せになる家」という意味で、私たち二人が一番、大切にしている「家訓」のようなものです。

「この家に住まう家族が、また、私たち家族と出会うすべての人たちと共に幸せになっていくことができる家」でありたい、との願いを込めた言葉です。